

評価を活用した個に応じた指導

1 学習状況の把握と評価

評価を単元の学習前、学習過程、学習の終了時の三つに分けると、「指導と評価の一体化」を図るためには、とりわけ学習過程の評価に注目する必要があります。

学習過程の評価は、教員にとっては子どもたちの理解や変容を把握し、自らの指導を確認、反省する情報になり、また、子どもたちにとっては学習の見通しを得るために行われるものです。個に応じた指導を展開する上で、過程の評価は重要な役割を果たすこととなります。ただ、毎時間の授業で4観点すべての評価を行うことは大変なことです。的をしぼり、それぞれの時間のねらいに合った評価観点をバランスよく単元の評価計画に位置付けることが大切です。

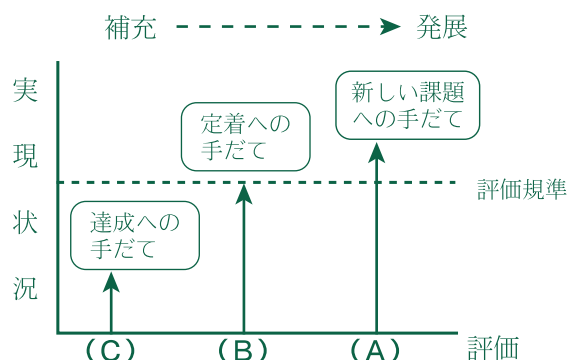
単元の指導と評価の計画において、観点別の評価規準を作成し、実際の学習場面を想定した具体的評価規準を設定します。そして、それを授業の中でいかに評価するのか、その評価方法を考え、評価の計画をたてることが大切です。

学習活動における具体的評価規準は、「おおむね満足できる」状況（B）を示しており、目標に対してどの程度実現していれば（A）や（C）とするのかを決める必要があります。（A）については、（B）の状態の質的な高まりや深まりを想定し、（C）については、量的な不足、また、質的には誤り、浅さ、狭さということから判断することができます。そのためには、（A）や（C）と判断した状況例を収集・分析・蓄積・共有することで信頼性の高い評価を行うことができます。

また、評価計画に記載した評価規準と評価方法が実際の指導や児童生徒の理解の状況など、具体的な評価場面において適切であったか、また、評価規準に適した評価方法であったかを吟味し、更によりよい評価計画に更新していきます。そのためにも、毎時間の評価に関する記録をメモしていくことが大切です。そして、「いつでも、どこでも」できる継続可能で日常的に行える評価を目指すことが重要です。

2 評価を生かす個に応じた指導の展開

「努力を要する」状況（C）となるおそれのある子どもに対しては、教員から様々な働きかけを行ったり、手だてを講じ、結果として「努力を要する」状況の評価となった子どもに対しては、例えば補充的な指導を行うなどの取組が必要となります。



また、目標規準に対して「おおむね満足できる」状況（B）や「十分満足できる」状況（A）の子どもに対しても更に努力目標や向上目標をもたせる指導が大切になります。そのためにも、児童生徒の自己評価を活用し、児童生徒一人一人に達成感や成就感をもたせることが次の学習への関心や意欲につながります。評価を個に応じた指導に積極的に生かすことにより児童生徒の学力と学習意欲を育てることになります。

3 効果的な自己評価や相互評価

指導と評価の一体化を図るためには、指導過程において多様な教材や教具を用意することや学び方が分かる学習展開など個に応じた指導が欠かせません。また、児童生徒の学習状況を把握する方法に、ノートやワークシート、レポートや作品、また、児童生徒の自己評価や教員による観察記録などがあります。中でも活用頻度の高い自己評価は、満足度や感想だけでなく、学習内容の確認や自己の成長の確認をさせるとともに、その評価を次の活動につなげることが大切です。そのためには、児童生徒の評価能力の育成が重要になります。自己を評価する力は、自己コントロール力や自尊感情の育成にもつながります。

一方、相互評価は学習内容の確認だけではなく、互いに学習の内容や方法のよさを認め合う態度の育成にもつながります。そのためには、子ども同士がお互いに認め合い、学び合うことのできる学級の雰囲気、学級経営が大切になります。

京都府総合教育センターでは、本年度から評価を活用した指導について、学校の課題に応えることのできる研究資料の作成を計画しています。